



THE FLOWER KINGS

NEW ALBUM

ADAM & EVE

— Roine Stolt が語る作品観 —

2

2004年のスウェーデンでのツアーの間に、Roineと話をし、7月20日リリース予定(註:インタビュー当時)のニュー・アルバムに関していくつかの質問をすることができた。

基本的に僕はキーボード・プレイヤーじゃないって考えていたんだ

Q:まず最初に、アルバム・タイトルに関してですが、我々はワーキング・タイトルが何だったか知っていて、それはワーキング・タイトル以外の何ものでもなかったわけですが、どうしてタイトルを「Adam & Eve」に変えたのか教えていただけますか?

Roine(以下R):過去にも起こったことだと思うよ。何かアイデアがあるからワーキング・タイトルがある。最初の曲になる1曲とか、アルバムのメインになる曲とかね。今回は「Love Supreme」で、今のところアルバムの1曲目になる予定だ。このアルバムの中で、より良い曲の1つだと思う。でも、何かの理由でアルバムのコンセ

プトを考えた時、このコンセプトというのはポスターとか、これからやるショーのバックドロップとかいうことだけど、あとTシャツとか、新譜のヴィジュアル的イメージだね、「Love Supreme」というのはいろいろ作り上げるのに難しいんじゃないかと気がついたんだ。これは愛、愛、愛っていう感じだよ。フラワー・パワー、愛、愛すること。「Adam & Eve」というタイトルはしばらくねかせていたもので、それにまつわるコンセプトをただ考えていたんだけど、それが大きな理由の一つだよ。最終的に一息ついて、アルバムは全部終わって、曲を見てみた時、どれがアルバム・タイトルになるだろうとアイデアをざっと見たんだけど、あまり複雑なものはいけなないんだ。みんなが簡単に覚えられるものじゃなきゃいけない。今回「Love Supreme」は可能性があったけど、「Adam & Eve」は誰でも知っていることだ。最終的に何かに決めなくてはいけなくて、考えついた中でベストのものだと思うよ。

Q：それではメーリング・リストでのアルバム・タイトルを「Love Supreme」にしないでほしいというリクエストに応えたという訳ではないんですね？

R：そう。あれは読んだけど、ちょっと馬鹿げていたね。30年～35年前にリリースされたジャズ・アルバムがあるとして、誰が真剣に気にするっていうんだい？確かに何人かは気にするだろうけれど、僕らのアルバムはジャズではなくて、しかも（同じタイトルのアルバムがでたのは）ずいぶん前のことだ。だから35年後にアルバムをリリースするとして、それを何かに変える意味は何だい？もし君が真剣に探したら、他にも「Love Supreme」というアルバムはあるよ。だから、言いたいのは、僕はアルバムを「Love Supreme」と呼ぶのは気にしなくて、でも今はそれは「Adam & Eve」になったっていうことだ。率直に言って、タイトルを変えて欲しいというリクエストがあったからタイトルを変えたと思う人がいても気にしないけれど、そうじゃないんだ。もし彼らがそう信じたいなら、かまわないよ。大したことじゃないさ。最終的に…大事なことじゃないからね。アルバムを「水と塩」とか「Top Hat」とか呼ぶことだってできるんだよ（ニヤッと笑う）。人々はアルバムを聴いて、音楽を聴くんだ。それが重要なのさ。

Q：それでは、各曲について話しましょう。それぞれについて少し教えていただけますか？

R：“Love Supreme”。これは僕がクリスマス前に作業を始めたものだ。最初のアイディアは、シンセサイザーの一つの音色から始められるかみてみようというものだった。たった一音ね。今やそれはちょっと違ったものになったけど、とてもとてもシンプルな何かなんだ。シンセでのシンプルなフレーズだ

よ。それと、それからヴォーカルが入ってきて、徐々に何かになっていくんだ。僕らは変なタイム・シグネチャでやっていて、それはちょっと込み入っているんだけど、そうするとヴォーカル・パートに面白いフレーズを入れるスペースもできるんだ。3つのパートのハーモニーにっていて、かなり面白いよ。君達は集中しなくちゃいけないね。歌詞のせいでそういうフレーズにしているみたいなものなんだ。ちょっと違ったものだよ。面白いリズムで、でもこのリズムはベースとドラムではなくて、もっとヴォーカルのフレーズのまわりに作られたものだよ。たぶん、典型的なTFKの曲と言えるね。曲に関しては完全に違うということはない。いろいろな物がちょっとずつ入っているんだ。いいメロディ・ラインがあって、いいヴォーカルがあって、おもしろいリズムのセクションがあって。歌詞の面では、一番うまく表現すると創造全般を賛美しているような感じだ。全てのプログレのアルバムになくちゃいけない長い曲の1つだよ。たまたまそうなったんだけどね。曲を書きはじめで、それが楽しかった場合、その曲を終わらせる方法を考えなくちゃいなくて、この場合20分ぐらいで終わったんだ。これは典型的なTFKの曲と言えると思うよ。

“Cosmic Circus”。これは僕がやったセッションからできたものだ。前は曲をキーボードで書いてシーケンサーで直接作業していたんだ。初期の段階でアレンジはもっと発展していたけど、基本的に僕はキーボード・プレイヤーじゃないって考えていたんだ。いくつかの良いコードは弾けるし、メロディとハーモニーを見つけることはできるけど、ある決まったスタイルになりがちなんだ。TFKのアルバムのそこらじゅうで見られるものだよ。フレーズ

やコードがそうであるように。だから、もし一番元のところに戻って、古いアコースティック・ギターだけでやってみたらと考えたんだ。古くて、弦も酷いものなんだけど、もしそこで何か良いものができたら、それはたぶん良い曲なんだって。小さなMP3のポケット・メモリー・レコーダーを買ったから、何かアイデアを思いついた時にすぐボタンを押せて、クオリティはとも悪いけれど、録音することができるんだ。アイデアとして、そこから発展させるものとしてね。

“Vampires View”：このアルバムで一番TFKらしくないものかもしれないね

Q：それでは、そのレコーダーを、作家が夜中に目が覚めた時何か良いアイデアを思いついてもいいようにペンと紙を置いておくように、ベッドサイドのスタンドの所に置いているんですか？

R：何回かやったことがあるよ。でもたいていは首からかけているか、スタジオに置いておくんだ。時々、他の曲の作業をしている時、ギターのダビングをしている時とか、ギターをいじっている時とかに、オーヴァーダブをしている曲とは全く関係ないことを思いつくんだ。だから、とても素早く何かが必要なんだよ（と、指を鳴らす）。プログラムを終了して、別なセットアップを始めるのは嫌だから、ポケット・メモリーを掴んで、ちょっとの間フレーズをいくつかやって、脇に置いておくんだ。それから後でそれを聴けるし、実際このアルバムのいくつかの曲はそこから発展したんだよ。そのMP3プレイヤーのとてもとても質の悪い録音からね。ともあれ、“Cosmic Circus”はそうやってアコースティック・ギターを弾きながらこの小さなレコーダーにハミングしたものの一つだよ。

ヴァースからコーラスに行く行き方はちょっと違うんだ。ある意味、シンプルに聞こえると思うけど、曲に入り込むには何回か聴かないといけないと思うね。この曲は、シンプルな曲であり、同時に極端にシンプルという訳でもない。君が何回も聴けて、シンセサイザーの部分に素敵な部分を見つけることができるのか、そういう曲だよ。

“Babylon”。Tomas Bodinの曲で、“Cosmic Circus”と繋がっているんだ。“Cosmic Circus”が“Babylon”に流れ込んでいくからね。“Babylon”はインストゥルメンタルのテーマだよ。Tomasがこれを持ってきたんだけど、「Sonic Boulevard」か「Pinup Guru」の為に作っていた曲なんだ。どっちだか覚えていないけど。ナイスで、メロディアスで、ちょっとシンフォニックで、ちょっと'70年代っぽく感じる仰々しいテーマだ。

“Vampires View”。Danielが歌っている曲だよ。これもこのMP3プレイヤーに入れたリフとかのセッションからできたもので、これは...他の皆が言うまで思わなかったんだけど、殆どボレロみたいな感じだよ。ほぼギター1本でとパーカッションとヴォーカルでゆっくり盛り上がっていくんだ。パーカッションから飛び出てくる邪悪な感じの音でサウンドスケープを構築しようとしたんだ。このアルバムで一番TFKらしくないものかもしれないね。違った感じのもので、他の皆がこの曲を好きになるのに、何回か聴かなくちゃいけないかったんだよ。僕はレコーディングを始めることになってJonasの家に行つて、デモをかけて、これらの曲を聴く時、表面上はとてもシンプルかもしれないけど、最初に聴いた時気に入らないかもしれないと思つているということを念頭に置いて欲しいと言つたんだ。1人か2人

は気に入るかもしれないけど、残りの人は何度も聴かなくちゃいけないって。僕がJonasの家に行った時、JonasとZoltanとTomasと僕がいたんだけど、初日にこの曲を聴いた時は、彼らは「まあまあだよ」と言って、この曲で何かできるかもしれないと言ったんだ。率直に言えば、この曲はその日にレコーディングした数曲のうちの一つで、今とても気に入っているんだよ。彼らがこの曲を、まあまあだから何かできるかもしれないと言ったのはかなり良いことで、それはかなり良い曲っていうことさ(笑)。だから僕はOK、時間をかけようって言ったんだけど、曲を5回ぐらい通してみたところで、彼らはこれはグレートなことになるって言ったんだ。普段と違うけど、すごく良くなると言って、この曲をボレロに例えたよ。だから、この曲はボレロのテーマみたいなものまわりに出来上がってるんだと思う。歌詞の面では、ヴァンパイアの視点から見た命についてみたいなもので、これもTFKとしては変なテーマだね。Anne Riceの「Vampire Tales」という本があって、これを元にした映画は2〜3回見ている、何か感じたんだ。映画のラストは好きじゃないけど、ムードはすごく気に入ったよ。とても悲しい感じだよ。だから、その映画にインスパイアされたと言ってもいいけど、他のクオリティや視点もあるんだ。永遠に生き続けることの淋しさや悲しさだね。孤独とか。どんな物でも良いと思うんだ。他の何かにも置き換えられるよ。ヴァンパイアである必要はないんだけど、何か共感を覚えられるような物や人であれば、現実には存在しなかったっていいんだよ。僕はこの曲をすごく気に入っているよ。アレンジとかその他の点で、最初から想像していたのとほとんど同じ感じに出来上がったと

思う。僕がこの曲を歌うのか？ってちょっと心配していたんだけど。デモは自分で録って、自分で歌えるかと思ったけど、Danielはかなりシアトリカルな歌い方ができると気がついて、彼がどんな風にできるか、Danielに任せたらいいんじゃないかって思ったんだ。ものすごく良い出来になったと思うよ。全てが殆ど僕がやりたかったように出来上がったんだ。だから、このアルバムの中でお気に入りの1曲だね。

“Days Gone By”。このヴァンパイアの曲からできた曲だ。フェードアウトしていくような感じだよ。だんだんと大きなクライマックスへと盛り上がって、それから空白へ、そして変わった音と、東欧っぽいピアノの部分に消えていくんだ。ヴァンパイアのテーマのムードに合った短いピアノ曲だね。

“Adam & Eve”。MP3プレイヤーに入れたリフからできた曲だ。ちょっとヘヴィな曲で、このアルバムで一番ヘヴィな曲かもしれない。プログ・メタルっていう訳じゃないけどね。典型的なプログ・メタルではなく、リフが沢山あるっていう感じで、TFKの典型的なシンフォニックなスタイルではない。Danielが歌っていると思うけど、この曲について他に何が言えるかな。歌詞は、一緒に住んでいる男女が、異なったレベルでお互いを理解することの複雑さと、一番最初の頃からあって、その後もずっと続いていくことかな。物事は変化するけど、それは興味深いものだ。

“Starlight Man”。これもギターとポケット・メモリのセッションからできたものだ。”Chicken Farmers Song”みたいに、ものすごく早く書いた曲だよ。全てがおさまる所にとっても早くはまったからね。だからこの曲には変なものはないよ。シンプルな曲な